

『日本海新聞』米子医学専門学校から鳥取大学医学部までの関係記事

豊島 良太

Nihonkai Shinbun's articles related to history from Yonago Vocational School of Medicine
under the prewar education system to Faculty of Medicine Tottori University

Ryota TESHIMA

昭和一四年五月二日、文部大臣より内閣に臨時附属医学専門学校設置が請議され、閣議決定した。翌二三日付けで、「帝国大学及官立医科大学に臨時附属医学専門学校を設置する」という勅令三一五号が公布された。多数の医師を短期間で養成することを目的としたため、入学資格を旧制中学卒業と低年齢化し、修学年限は四年とした。

その後、太平洋戦争が始まり、臨時附属医学専門「部」に加えて、昭和一八年に初めて官立医学専門「学校」が前橋に設立された。続いて、昭和一九年には青森医学専門学校、東京医学歯科専門学校、松本医学専門学校の三校が設置された。その翌年、昭和二〇年三月、勅令一三一号でもって米子医学専門学校（米子医専）の設置が決定され、七月一日に新入生一五〇名の入学式が行われた。八月には終戦となったため、その存続の是非や医科大学（医大）への昇格の可否そして新制大学の設置などの難題が短期間のうちに次々に起こった。

終戦を挟んだ混乱の時代であったため、当時の国、県、市、学校で作成された公文書や関係者の日記、書簡などの一次資料はほとんど残存していない。しかし、その時代に関係者に取材し書かれた新聞記事が残っている。それは、当時の鳥取県唯一の地方紙であった日本海新聞である。

現在、当時の日本海新聞は原紙とコピー版、マイクロフィルムの形で鳥取県立図書館に残されている。時とともに劣化が進むことは自明

で、二〇二〇年の米子医専設置から四分の三世紀を経たこの機会に関連記事の翻刻を試みた。

調査対象の期間は、米子医専設置一年前の昭和一九年から鳥取大学医学部として初の入学生を募集した昭和二六年までとした。この間は大きく四つに区分することができる。最初は、戦時中の米子医専設立まで（記事番号一〜七）、次は医専の存廃や移転問題、入学資格の変更などのあった終戦直後の混乱期（八〜二三）、三つ目は、医専から医大への昇格まで（二四〜四七）、最後は、医大の新制鳥取大学への参加そして医学部として初の専門課程ならびに医学進学課程の新入生募集まで（四八〜六〇）である。節目となる出来事の記事について、番号、日付、見出しを次に示した。

米子医専から鳥取大学医学部までの変遷、そして戦前から戦後の医師養成や医学教育制度の慌ただしい移り変わりの一端を示す資料となれば幸いである。

番号	掲載日	見出し
一	昭和一九年二月一九日	県下に医専新設 明春四月から開校決定
二	昭和一九年二月二〇日	官立医学専門学校 米子市に設置・明春開校

- 三 昭和一九年二月二日 医専開校に協力 喜び語る齋藤市長
- 四 昭和一九年二月二七日 官立医専は五月開校 学校は義方国民精華女学両校 附属病院は米子、博愛両病院を充当
- 五 昭和一九年二月三一日 医専促進に挙市突進 米子市常会で決議
- 六 昭和二〇年 一月三三日 武島知事 医専と弓浜計画で現地協議会へ
- 七 昭和二〇年 五月一日 米子医専合格者発表
- 一〇 昭和二〇年二月二十九日 美保は米子医専へ 大篠津は鳥取師範に交付
- 一三 昭和二二年 三月三一日 米子医専拡充される 女子の入学も許可?
- 一四 昭和二二年 四月一日 米子病院を医専が接収 医大の創設基礎成る
- 一五 昭和二二年 四月二十九日 デマと判った米子医専廃止 野坂市長の婦米談
- 一六 昭和二二年 五月 九日 今年から男女共学 女医養成に米子医専の断
- 一八 昭和二二年 六月 四日 米子病院 医専附属病院に
- 二四 昭和二二年 九月一五日 米子医専大学昇格明春からか
- 二七 昭和二二年二月一四日 視学委員ら諸施設調査
- 二八 昭和二二年二月一五日 問題は施設の拡充 完備すれば大学に昇格
- 三一 昭和二二年 二月 六日 大学昇格はゼヒ必要 期成同盟を結成・猛運動
- 三五 昭和二二年 二月二二日 文部省も賛意表明 米子医専の昇格運動進む
- 三六 昭和二二年 二月二七日 米子医専大学に昇格 二六日の臨時閣議で決定
- 三八 昭和二二年 九月 七日 大学開設に難点 敷地確保が問題
- 三九 昭和二二年一〇月 二日 敷地問題に曙光 解決に市の協力
- 四一 昭和二二年二月一〇日 校名は米子医大 明春開設正式に決る
- 四二 昭和二三年 二月一四日 米子など五医専昇格
- 四八 昭和二三年 五月一四日 医大も含む県大学 きょう打合会に提案?
- 四九 昭和二三年 五月一五日 複合には各校賛意 医大参加への態度未定
- 五〇 昭和二三年 五月二六日 設立準備着々進む 二九日最後原案討議 米子医大は不参加
- 五六 昭和二四年 二月二二日 県大学に医大包含 文部省から内報届く
- 五八 昭和二五年 一月一四日 医学部に予備課程 鳥大の募集要項決る
- 六〇 昭和二六年 一月二三日 医学部五〇名 鳥大で学生募集

凡例

一 本稿は、昭和二〇年三月に設置された米子医学専門学校から、戦後の短い期間に名称や制度などを変えて、米子医科大学を経て鳥取大学医学部となった過程に関する「日本海新聞記事」を収録した。米子医専設立前夜の昭和一九年から、鳥取大学医学部として初の入学生を募集した昭和二六年までの記事とした。この間の日本海新聞は左の期間を除き、鳥取県立図書館にコピー版とマイクロフィルムで残されている。

コピー版

昭和一九年一、五、六月

昭和二〇年一、八月、一一、一二月

昭和二二年四、六月

昭和二二年一、二月、六、一〇月

マイクロフィルム

昭和一九年 コピー版と同期間

昭和二〇年一、八月

昭和二二年三、五月、七月

一 昭和二〇年八月から昭和二六年一〇月までの記事の抽出には、鳥取県公文書館の「戦後日本海新聞記事見出し一覧」の検索を用いた。検索対象語は「米子医学専門学校(〇)」「米子医専(三八)」「医専(五五)」「米子医専(〇)」「米子医大(三八)」「医大(六一)」「鳥取大学(三四)」「鳥大(四四)」とし、該当件数は各対象語のカッコ内に示した。これらの記事の中から、各学校の成立や入学試験、学則、学校の建築、整備などに関する五三点の記事を抜き出した。昭和一九年については、コピー版の全紙を確認し、五点を選び出した。昭和二〇年一、八月については、他施設等の原紙をマイクロフィルム化した資料が鳥取県立図書館に残されており、これら二点の記事を選び出した。なお、この資料は一、四月の大部分、五月は七分、六月は二分、七月は二分、八月は五分が欠けている。

一 判読は先ずコピー版で行い、コピー版の無い時期の記事や判読の困難な文字のある記事については、マイクロフィルムから印刷した紙面を対象とした。これらの作業によっても判読困難な記事(一三点)については原紙を確認した。それでもなお判読ができない文字は文中の該当部位に字数分を□で表した。

一 記事は年代順に、通し番号を付けて並べた。

一 翻刻と表記の方法は次の通りとした。

- ・ 見出しを太字で記した。複数の見出しのある場合には、主見出しに(主)、脇見出しに(脇)、頭見出しに(頭)、尻見出しに(尻)とした。前文のある場合には、その文末に(前文)と記した。
- ・ 当時の紙面は一五段組で、掲載部位は原則、紙面の上からの段数で表した。特に紙面の右カタの掲載記事には「トップ」と記した。
- ・ 使用字体は常用漢字とした。
- ・ 句読点は文意の変わらない範囲で加えた。
- ・ 改行は原文通りとした。但し、原文と異なり、段落の行頭は一字下げた。
- ・ 「?、!、△、◇、・・・」などの記号は原文通りとした。
- ・ 誤りと考えられる字句も原文通りとし、その箇所には「傍線」を付けた。
- ・ 数字は、「廿」のみ「二十」に改め、それ以外は原文通りとした。
- ・ 「銚衡」と「銚衡」の両者が使われていた。「銚衡」に統一した。
- ・ 写真は説明文のみ掲載した。
- ・ 個人名は投稿記事(資料番号二〇、二一)のみ伏字とし、他は原文通りとした。

(翻刻に当たりご協力いただいた鳥取県立図書館、鳥取大学中央図書館に深謝する)

一 昭和一九年二月一九日

県下に医専新設(主) 明春四月から開校決定(脇) (五〜六段)

官立医学専門学校の山陰地方新設はさる十五日の閣議で既存建物その他の関係から鳥取県に設置と決定、明年四月から開校するが、県内のうち鳥取、米子、倉吉の何れに設置するかは未定で大体来る二十五日ごろには確定する予定である。

二 昭和一九年二月二〇日

官立医学専門学校(主) 米子市に設置・明春開校(脇) (トップ 一〜二段)

官立医学専門学校の鳥取県内設置は十八日文部省から米子市に設置決定の旨入電があったが、同医専の校舎ならびに附属病院はすべて既存建物を転用する計画で校舎は義方国民学校、病院は米子市博愛病院の転用が有力視されている。従って同医専の設置に伴い地元では病院、教育等に使用する土地建物のほか相当現金の負担があり、これは現物寄付、一般寄付金その他起債等により支弁することになる見込で、地元負担も大体に無理のないものよう

であり、国家郷土のため地元の絶大なる協力が期待されている。

同医専が本県設置に決定するまでには武島知事はじめ各関係方面の絶大なる蔭の努力が秘められており、特に今回の官立医専設置が全国三ヶ所という点からいっても各地の誘致運動は相当激しく、決戦下この種の政治的運動は一時下火になってきているとはいふものの問題が官立医専の設置だけに各県の暗中飛躍は見逃せぬものがあり、下手をやると本県の設置決定も最後の土壇場で覆りそうな情勢さえ看取されていたのである。そうした中で本県設置と決定されたことは何よりも幸運であり、県民としては何を犠牲にしても明年四月の開校まで□□遺漏なき準備を進めて置かなければならぬわけである。今回の官立医専設置が本県に決定されるまでの経緯を顧みると、十一月下旬米原貴族院議員が東京から帰県して文部省に全国何ヶ所かに官立医専設置の計画があり山陰地方にも予定されているという情報を持って帰ったので、県当局は文部省と連絡交渉を開始し文部省から係官が来県、米子、鳥取、倉吉の三ヶ所をこれが候補地として詳細に調査帰京したが、一方本県としては知事名をもって去月十七日付で文部大臣宛に官立医専設置の陳情書を提出、本県の特殊事情並びに医学専門学校の全国的配置状況を考えて是非とも本県に官立医専を設置してもらおうよう陳情した。次いで武島知事は県会終了とともにただちに上京、二宮文相はじめ藤野次官、永井同省総務局長、関口専門学務局長等、特に面接して協翼を仰ぎ特に本県出身の近藤教学局長、また本県に学務課長として在籍した専門学務局の辻田学務課長同じく総務局総務課事務官内藤蒼三次氏らの格別の協力を得て大体本県設置方の内意を得て帰県した。

これよりさき県当局は県政審議会を開き田中県会議長の発言により、この際県内一致して官立医専獲得の実現を期することとなり、その設置場所について米子、鳥取、倉吉の何れに決定されるかは文部当局に一任することに決定したのである。その後本月十五日閣議においていよいよ本県設置と決定を見たが、全国三ヶ所に官立医専設置予定のうち大蔵省でわずか一ヶ所を認められたに過ぎず、しかもこの一ヶ所が本県に決定したことは本県としてまことに幸運といわねばならない。

このほか徳島県の県立医専が官立になったに過ぎず、新たには専門学校としては広島県に女子師範、愛知県岡崎市に男子師範が設置された。ことに今回の官立医専設置に当たっては広島県の如き多年これが設置方を熱望している所であり、今回も最後まで猛烈なる運動を政府当局に対して展開し、一時は閣議の前日の如き広島県側の熱意によりその方に傾いていた模様であったが、本県選出在京代議士豊田収代議士は三好英之代議士と協力し内務、大蔵

両省に接触、幸い文部当局の好意により本県に設置決定を見たものようである。今回の医専設置については県当局、県出身代議士、県政審議会の一糸乱れざる運動の結果、見事にしかも何のゴタゴタもなく最後の決定を見、その設置場所も新建築不可能の際、既存設備を利用せざるを得ない関係上、文部当局の決断により米子市に決定を見たものである。

地元の協力を(主) 武島知事談(脇) (右記事の左、二〜三段)

官立医専が全国三ヶ所のうち本県に決定されたことはまことに幸運といふべきである。特に本県は前の文部大臣橋田邦彦氏をはじめ多数すぐれた医学者を出している所であり、県民の性格からいっても相応し、既存設備の関係で米子市に決定されたが、地元としてもこの幸運に感激して明年四月の開校までに万全の準備を進めていきたいと思う、地元負担も大体に無理のない程度だから国家のため郷土のため大いに協力するよう期待してやまぬ。

明春から開校(主) 三学級百二十名(脇) (右記事の下、四段)

なお同医専は明年四月新学期から発足することになり一年三学級で一学級四十名ずつ合計百二十名を定員として授業を開始する予定である。

三 昭和一九年一月二二日

医専開校に協力(主) 喜び語る齋藤市長(脇) (二〜四段)

政府は明年四月から本県下に医学専門学校開校を認可して開校地を米子市に決定したが、二十日齋藤米子市長は医専開校に関して大要左の如く語った。ただ今のところまで具体的のことを決定していないので、詳細なことは申し上げられない。地元の米子市として今回の様な好機を失つては専門学校開校等は将来再び出来がたいことと思われるので、この際できるだけの協力を致したいと思う。開校場所は病院と学校がこれに当てられることに大体確定しているが、どの病院どの学校ということは未定である。学生は男子部で主として軍医の養成に主眼を置いていのではないかと思われるが、決戦下の国家的要請に応じて新設される医専の意識はきわめて重要なものがある。

四 昭和一九年一月二七日

官立医専は五月開校(主) 学校は義方国民精華女学両校 附属病院は米子、博愛両病院を充当(脇) (二〜四段)

官立医学専門学校の米子市設置に伴い、これが具体的建設促進打ち合わせのため文部省の招請によって急遽上京した古城内政部長は二十六日帰来して次の如く語る。

△本省では官立医専設置について本県に負担力あるや否やを危惧している。各県の官立医専誘致運動もまだ継続されている模様であるが、本県としてはできるだけのことをやるつもりだ。本省としては大蔵省の査定で設備費百万円、経常費七十二万円しかないもので、従来の官立医専設置の例もあるから、この程度にしてみたいということだった。従って県で学校を建てる積りで極力援助してほしいと要求されたわけだ。

△学校は義方国民学校と精華女学校を使用することになり、また医専としては五万坪の敷地が標準だから周囲の敷地や空地を確保してもらいたいということだった。このほか軍事教練も必要だから、後藤グラウンドを運動場として充てて欲しいという要望もあった。

△病院は三百床要るから米子、博愛病院を提供してほしいということだ。非常教育をやるので寄宿舎制にするから寄宿舎の設備も要求されている、このほか教授官舎二十戸の提供を要望されている。

△現金寄付は不要であるが、既設建物を改造して教育の出来るようにして貰いたいということだ。また既設学校には屍体置き場や解剖室がないのでこの設備も必要であり、両病院に臨床講義室を作してほしいということだった。

△大体以上の要求を実現せねばならぬわけだが、近く本省から調査官が来県するので同調査と睨み合わせて具体案を作り、本県として出来るだけの努力をつくしたい。なお開校は五月一日の予定で三学級百二十名、四ヶ年修業の予定である。

五 昭和一九年一月三一日

医専促進に拳市突進(主) 米子市常会で決議(脇) (六〜七段)

米子市掉尾の常会は二十八日午後三時から市会議場で開催、先ず当面の問題である官立医専設置、軍都建設、重油譲渡の三問題を齋藤市長説明。種々意見の交換あつて三問題とも決戦の決意を以て遂行に協力することを決議して午後六時散会した。

即ち医専問題は政府の方針に従って全市一体で引き受け建設の促進に当り、またこれに伴う校区改組も大同の方針で市に協力し、また市保管の重油八〇〇リットルを県水産業界に譲渡して魚勢促進に協力、軍都建設も決戦即ちの大乗的見地で臨み促進に万全を期することになった。

医専設置調査(主) 本省係官が来県(脇) (右記事の左、七段)

田中文部省建築課長は高橋文部省属を帯同して一月五日午後来県、米子市

に新設する医専の打ち合わせ並びに調査を行うが、同日は鳥取に一泊の予定。

六 昭和二〇年一月二三日

武島知事(主) 医専と弓浜計画で現地協議会へ(脇)(四〜五段)

官立米子医専と弓浜都市建設の武島行政二大施□促進のため武島知事は古城内政部長、鶴田教学課長、杉本庶務課長、小椋秘書課長を帯同して十一日午後零時四十五分着列車で来米、直ちに医専促進に関し同市の関係病院、学校等を視察のうえ市役所において病院、学校関係者と親しく懇談した。十二日は引き続き同市役所と同じく医専に係る米子市並びに西伯郡夜見成実両村の一市二村組合立角盤校の組合解消問題につき齋藤市長、夜見、成実両村長等と懇談し午後は二時半から西伯地方事務所弓浜地方振興委員会に臨み同地方都市計画建設促進に関して協議を行った。

七 昭和二〇年五月一日

米子医専合格者発表(四〜九段)

七月一日から開校する官立米子医学専門学校入学者は約六千名の志願者の中から、第一次に合格した三百十名を更に五月二、三、四の三日間同校で第二次試験を行ったうえ、十日合格者百二十名を左の通り発表した。うち鳥取県関係のものは米子中学の二十五名、鳥取一中二十二名、同二中十四名、倉吉中学十三名、境中学八名、育英中学四名、その他四名で合計九十名の多数に上っている。

なお同校では目下校舎に充当される旧義方国民学校並びに米子商業学校の校舎改造を急いでいるが一般教室は主として義方校を当て、生徒の寄宿舎は女子商業の一部を充当するはずである。

以下、合格者百五十名(本文は百二十名の記載)の名前(原籍)が記載されている。原籍は鳥取が八十四名、その他が六十六名であった。その他の内訳は島根十二名、福岡九名、広島、兵庫各五名、東京、大阪、山口各四名、岡山、熊本、長崎各三名、京都、愛媛、大分、佐賀各二名、福島、千葉、神奈川、岐阜、三重、福井各一名である。筆者注

二十三年の校史に幕(主) 米子女商移管式(脇)(右記事の左、八〜九段)

官立医学専門学校の開校に伴い校舎を提供し、輝かしい二十三年の歴史の幕を閉じ、米子市立に移管される財団法人米子女子商業学校では、九日午前十一時からその移管式及び謝恩会を開き、功労者として同校職員安田□、足立重利の両氏及び教育後援会長岸末吉、松田稔の四氏に感謝状を贈り、全校

六百の職員生徒は旧校舎の前途を祝福しつつ市立しゆく徳高女校舎へ移転を完了した。

八 昭和二〇年一月二六日

米子医専転入(主) 合格発表三十日(脇)(一三段、広告除いた最下段)

官立米子医専ではお医者さんになろうとする陸海軍諸学校生徒の転校者入学試験を二十五日午前八時から同校で行った。志願者は百六十二名で入学者は僅々十名というここにも苦しい試験地獄を現出した。なお合格者発表は三十日である。

九 昭和二〇年一月三日

米子医学専門転入学合格者(一三段、広告除いた最下段)

米子医学専門学校転入学試験合格者は三十一日次の通り発表された。十三名の個人名の記載、全員男名前。筆者注

一〇 昭和二〇年一月二九日

美保は米子医専へ(主) 大篠津は鳥取師範に交付(脇) 飛行場転用(頭)(三〜四段)

鳥取県より内務省を通して申請中の美保飛行場の施設は米子医専へ、大篠津飛行場の施設は鳥取師範へ交付する旨通牒があった。右両校では早速教育機関として転用の予定である。(前文)

米子医専移転(主) マ司令部へ申請(脇)(右前文の左、三〜四段)

米子医専は今年四月米子市義方国民学校を校舎として開放していたが、諸施設不備のため学校当局では戦後施設の拡張を要望、今回県から美保海軍航空隊跡の移管を受け移転を計画、内務省の許可申請に関する諒解を得たので、連合軍司令部へこれが許可を申請することになった。

一一 昭和二〇年一月二五日

研究室を美保へ(主) 米子医専移転準備進む(脇)(九〜一〇段)

既報の米子医専移転問題はその後県および学校当局において着々検討中であるが、大体において本校舎は現在の義方、精華の校舎をそのまま充当すると共に附属病院の施設を拡張して精神科、耳鼻咽喉科等を本校の一部に附設。主として基礎医学方面の研究室等を美保飛行場へ移転する見込みであり、実現の上は将来総合大学の基礎となるべく多大の期待が払われている。

一二 昭和二十一年三月六日

米子医専生徒募集（九段）

米子医専本年の生徒募集人数は八十名で、十日から入学願書の受付、四月十五日より筆記試験を行うが、既報の同校一部を美保航空隊跡へ移転する問題も急速に具体化するものと見られている。

一三 昭和二十一年三月三十一日

米子医専拡充される（主）女子の入学も許可？（脇）（一―二段）

米子医学専門学校では三月十五日から生徒募集の予定のところ、本省の指示にもとづきこれを停止、目下当局で折衝中であるが、右は文部省の方針として戦災校並びに二十年度新設の専門校に対して一律に生徒募集を指示したためであり、その後本省においても種々検討の結果、米子医専の如きは設備その他を充実し、かえって戦災地の医専をもこれに併設する程の内容を存していることが明らかになったので、近く官報をもってこの旨を発表するはずであり、大体募集開始は五月の予定である。

これとともに同校では学則を改正して新学期から女子の入学も許可するよう計画中で、男子は八十名、女子は二十名募集の見込みである。また外地各医専の引上学生に対しては、四月十五日までに在学証明、戸籍謄本とともに転校願書を提出すれば、人物考査の上編入せしめるはずである。

なお同校の美保航空隊跡移転問題は一旦決定せるも、その後の情勢変化で目下折衝中であるが、移転可能な場合は新校舎にうつり附属病院及び寄宿舎はそのまま存置し、高学年の研究実習に充当することに内定している。

一四 昭和二十一年四月一日

米子病院を医専が接収（主）医大の創設基礎成る（脇）（七―八段）

米子医学専門学校の財団法人米子病院接収問題は四月から県当局が中心となり折衝中の所、戦争のため一時中止となっていたが、終戦以来本格的な折衝が開始され、病院の評議員会においても医学の向上に貢献せんとの熱意から無償呈上の動議なり、三十一日午前十一時から西伯地方事務所議場に評議員会を開き林知事との間にその折衝調印式を挙げた。

財団法人米子病院は元西伯郡病院として創立、後に米子病院と改称、爾来幾十年間、医療に貢献した足跡を残して四月一日から米子医学専門学校附属病院と看板を塗替え民主病院として新しく発足することになり医科大学の創

設基礎を作った。

一五 昭和二十一年四月二十九日

デマと判った米子医専廃止（主）野坂市長の帰米談（脇）（一〇段）

二十三日全国市長会議に上京出席した野坂米子市長は二十七日午前七時三十一分着の列車で帰米した後、模様を左の如く語った。

協議事項は種々あったが、米子から提出した選挙人名簿脱落問題については、これと同様の問題が十四、五都市から提出されたが、内務省からは極力善処する旨の答弁があった。また米子市医専は廃止されたとかいう噂があったが、これについては当局は「そんなことはない、現在募集延期となっているが何時頃募集するかについて言明できないが、募集基準のもっとも早い分になるだろう。」

一六 昭和二十一年五月九日

今年から男女共学（主）女医養成に米子医専の断（脇）（九―一〇段）

学則改善のため生徒募集延期中の米子医学専門学校では十日から願書受付を開始するが、募集人員は四十名で、第一次試験は書面銓衡の上六月十二、四日より行う。同校は今回から全国最初の男女共学制の英断に出るが、右につき下田校長は語る。

最も重要な国民保健の問題に医師の持つ役割は重要であるが、学校で男子の医師をいくら養成しても、その大部分は都会に出て行くので、これを防止するため移動性の少ない女医を養成し各自の出身地で開業をさせるべく、かねて文部省と交渉中だったもので、今回全国最初の医専男女共学が認可されたわけである。

一七 昭和二十一年五月二八日

米子医専願書殺到（主）女子も交る応募十三倍半に上る（脇）（五―六段）

十日から入学願書受付を開始した米子医学専門学校では二十五日で締切だったが、同日付の願書は二十七日も殺到。今まで受付けた願書は募集人数四十名に対し約十三倍半の五百三十九名（中女子四十一名）で、なお二十五日付未処理のものが二百余通であって試験地獄は早くも展開されんとしているが、これらを地方別に見ると遠く九州、関東からの応募者も相当あるが、主として鳥取、島根の両県が圧倒的である。

第一次銓衡は書類銓衡で六月一日発表、第二次試験は十三、四の両日実施す

る。

一八 昭和二十一年六月四日

米子医専第一次合格者二百三十名（一段）

米子医専の応募者は募集人員の約十七・七倍の七百余名（内女子百十名）であったが、書類銓衡の結果、第一次合格者は応募者の三分の一で二百三十名（内女子三十二名）であった。

米子病院 医専附属病院に（右記事の左、一段）

▲米子病院は一日から米子医専附属病院として新発足した。

一九 昭和二十一年七月一日

米子医専教授助教授を増員（一二段）

大学昇格を前に控えた米子医学専門学校では、このほど次の如く教授、助教授を充足した。

△教授齋藤信（独語） 林昇（耳鼻咽喉科） 神鳥文雄（眼科） 柴田徹（数学）
各氏△助教授野瀬とし（英語） 林美喜子（数学） 両女史

二〇 昭和二十一年七月一七日

医専昇格反対（投稿欄「鐘」四～五段）

「米子医専昇格実現可能云々」の発表に対し、現在米子医専に在学する者として、これに全面的に反対してみたい。理由は一言にして言えば、設備の全然不完全というより皆無の医専を一躍大学に昇格さすとは目に余る暴挙であるからである。実習設備なく教授陣の整備すら行われていない現状では、廃校の方を先に考えるべきだと思う。科学特に医学は実習の上に成る学問である、如何に講義が充分でも実習が無ければ「百聞は一見にしかず」で、死んだ学問になってしまう。国家試験さえ行われんとしている今日、このような不完全な設備の医専を卒業したとて、国家試験合格など夢にも考えられない。開業医師過剰といった見地からも米子医専はじめ新設医専の廃校は至当と思う。よって大学昇格より廃校を行い、在学生を他の設備ある医専へ収容されることを希望する次第である。

在学生として母校愛といったような小さな感傷より祖国日本建設の一大部門である医学水準向上の方が更に必要であることを指摘しておく。（米子医専、

●●● 学生名）

二一 昭和二十一年七月二一日

医専昇格賛成（投稿欄「鐘」五～九段）

去る十七日付本欄に米子医専昇格反対の一文があったが、同論は小生の名を騙り且つ医学生なりとして母校の廃校を医学水準の向上と見做すが如き暴論を唱えているが、その方法たるや実に卑劣であり、その論旨たるや真に低級である。ここに小生および米子医専のためいささか反駁せんとする。世界文化史を按ずるに近代文化国家の発展はこれすべて科学にその基礎を置きたるものにして、今次日本の敗因もしばしば指摘さる如く日本に真の科学なく、世界の進運にはるかに遅れ旧世紀の蒙迷に閉じこんでいたためである。ひるがえって我が米子医専は戦時中の軍医養成の如き目的と変り、現在は自然科学振興の中心たると共に地方文化向上の役割を果たさんとするものである、されば、医育の問題とも関連し大学昇格は当然行われるべきものにして、依然専門学校にとどむべきものでない。また最近医療の充分だといひ得ない状態にある地方において、医師の養成は急務にしてまた医療の徹底化こそ肝要にして医者過剰とは偽氏は何を恐れてこれを言うのであるか全く理解に苦しむ所である。ここに我が米子医専の存在の意義と大学昇格の要求当然なるものがあるのである。さて次に設備の点である、現在設備においても欠くる所あるはこれを認め我々は不足を感じるものであるがこれは唯に我米子医専のみならず全日本における共通の悩みである。成程科学は実証の学である。従って実習を欠いては死んだ学問とはなり得るが然れども徒に多数の実験と実習が必ずしも正確なる結論或いは知識を与えるものとは断じ得ないのは近代精密論を待つまでもない、要は科学における実験態度と計画である。されば与えられたる資材と設備をもって十二分の能率を上げるべく学内全体つとめていけるものである。もちろん充分なる設備とマテリアルは望ましい、然れども現在は望むべくして不可能なり、これ一重に一般の協力によりお願いするものである。破壊か建設か無一物に近き敗戦日本にはすべてが同じである。設備不足をもって破壊のみ行えば何により再建が得られるであろう。我々は建設の第一歩を踏み出し、この無一物に近き日本を科学により再建せんことを祈り、よって大学昇格の日の遠からんことをのぞむものである。その日遠く数多の困難があろうとも必ず近き将来にあることを信ずる。（米子医専、

●●● 七月一七日投稿文と同一学生名）

二二 昭和二十一年八月七日

三科を新設 診療は九月（主） 米子医専附属病院（尻）（九～一〇段）

米子医専附属病院では新発足とともに眼科、皮膚泌尿科、小児科の三科を新設すべく準備を進めているが、診療開始は九月一日頃からと見られている。なお各部長は左の米子医専の教授である。△神鳥博士(眼科) △吉田博士(皮膚泌尿科)、△清野博士(小児科)

二三 昭和二十一年八月一日

外地医専引揚学生銓衡入学許可 (五段)

米子医専では外地医専引揚学生を試験銓衡の上、入学を許可することになった。出願期日は八月十日から九月五日まで、試験は九月十六日実施される。

二四 昭和二十一年九月一日

米子医専大学昇格明春からか (主) 本省では採用数既に準備中 会計課長

婦来談(脇) (八〇段)

米子医専湯野会計課長は同校の大学昇格予算書を携行上京中であつたが、十二日婦米同校昇格問題につき、左の通り語つた。

本省では明春高校卒業生八十名を募集する様既に大学昇格も決定されているが、地元民の熱意がもつと昂揚される様にとの要望があつた。

十六日に銓衡試験 (右記事の左、九段)

米子医専では外地引揚学生の転入学銓衡試験を十六日午前八時から筆答、口試、身体検査の順で執行二十三日合格者を発表する。

二五 昭和二十一年一〇月一七日

大学昇格へ医専を調査 (七段)

米子医専の大学昇格についてその学事状況を調査するため今月下旬文部省視学委員東龍太郎(京大) 上野一誠(金沢医大) 両教授が来米する旨、このほど文部省から米子医専に入電があつた。

二六 昭和二十一年十一月二日

米子医専昇格は地元の熱意如何 (主) 事務部長池田氏談 (尻) (八〇九段)

米子医専の大学昇格問題について当局と打ち合わせのため上京中の同校池田事務部長は十一日朝婦米、次の通り語つた。

目下文部省では米子医専の大学昇格問題について予算関係など大蔵省と交渉中であり、まだ昇格は確定したわけではない、十二日の夜行で文部省視学委員草間京大(記事二八では慶大とあり) 教授と上野金沢医大教授が来米、

本校を調査視察して帰ることになっており、要するに地元の熱意如何によつて当局の腹も決まるものと思う。

二七 昭和二十一年十一月四日

視学委員ら諸施設調査 (主) 米子医専 (尻) (一段)

米子医専の大学昇格問題について同校を調査のため十三日来県した文部省視学委員草間京大(記事二八では慶大とあり) 教授および上野金沢医大教授は同日午前午後にわたり、下田医専校長の案内で同校の諸施設を詳細に調査したが、十四日には大学昇格の場合予定校舎の元美保第一航空隊の建物を視察する。

なお十四日には林知事も来米、文部省視学委員等と懇談し米子医専大学昇格を促進する。

二八 昭和二十一年十一月五日

問題は施設の拡充 (主) 完備すれば大学に昇格 (脇) 米子医専 (頭) (七〇九段)

米子医専の大学昇格問題について同校視察中の文部省視学委員草間京大(記事二六、二七では京大とあり)、上野金沢医大両教授は十四日元海軍美保航空隊の建物を視察、附属病院に改築の適否を調査した。林知事、鶴田県教学課長は来米、同市皆生温泉東光園で野坂米子市長、遠藤市会議長、下田医専校長と視学委員を囲み昇格問題につき懇談した。草間、上野両視学委員は語る。

医学教育の目的を達するには十分な施設がなければ大学に昇格することが出来ない。その点、米子医専はさきに誕生したばかりで、赤ん坊に歩けというが如きで、諸施設の完備を求めるのは無理であり将来に期待せねばならない。特に現在の附属病院は医学研究の立場から見ても不十分であるが、元海軍美保航空隊の建物は非常に立派なもので、もし連合軍の好意によりこれを米子市内に移して病院に改築することが出来れば申し分ない。要するに医科大学は立派なお医者さんを教育するというのが第一の目的で、地元熱意あれば、昇格問題は自ら解決するものと思う。

二九 昭和二十一年十二月四日

入学考査に民論を集む (主) 米子医専は大学昇格へ (脇) 鶴田教学課長婦

米して語る(頭) (五〇七段)

本省と打合せを終えた鶴田教学課長は二日夜婦県して、次の通り語る。

△医専の昇格問題については既に本省や関係方面で決定的意向がまとまっております、今回内務省から予算案その他収支予算案等を大蔵省に提出されたので、ほとんど昇格確定の見透しがついた。しかし大蔵省が立てる実予算がどの程度に算定されるかは不明であり、いづれ地元県民の全面的な協力を求めなくてはなるまいと思う。

(一)の後、六、三、三制改革、中等学校の入学考査についての記述あり。

三〇 昭和二十二年二月一日

供米農家に感謝さる(主) 医専の昇格はなお未定(脇) 林知事帰来談(頭)(九一二段)

地方長官会議に出席した林知事は三十日夜帰任、左の通り語った。

(談話は五項目あり、四番目が医専関係で、その談話のみ記載する。)

△米子医専の大学昇格に関しては文部次官、草間医学刷新委員会、大蔵省主計局長に面談種々懇談したが、昇格は充分見込みはあるが、必ずしも樂觀を許さない情勢なので、設置促進運動委員会を作って活発に促進したいと思う。

三一 昭和二十二年二月六日

大学昇格はゼヒ必要(主) 期成同盟を結成・猛運動(脇) 米子医専問題(頭)(左カタ一―二段)

新学制の実施とともに大学昇格か廃止かの岐路に立っている米子医専の問題は、県民の注目するところであるが、同校の設置によってもたらされた県下の衛生思想ならびに施設、診療の恩恵は多大なものがあつた、これを廃止されることは本県はもちろん山陰の衛生問題に相当な暗影を投げかけることになるので、民間有志の間で大学昇格運動が行われてきたが、これを一本にして強大な運動を展開すべく米子医専大学昇格期成同盟が県下の政治、産業、教育、文化など各界の人々を網羅して結成、県当局に呼応して民間の猛運動を起こすこととなつた。

これが準備会は四日県議会議室で開かれた。期成同盟の会長に田中県会議長、副会長に野坂米子市長、遠藤同市会議長があたり、役員には本県出身貴衆議院議員はじめ県議、実業家、学校長その他各種団体の関係者が集まり十三日頃には代表者が上京して文部省に陳情するほか県民にも呼びかける。

三二 昭和二十二年二月八日

陳情戦の火蓋(主) 米子医専期成同盟十三日上京(脇) (四―五段)

米子医専の大学昇格実現は既報の通り地元官民の今ヒト息の熱意と努力次第という見透しに到達したので、さきに結成された米子医専昇格期成同盟会による挙縣運動を展開する一方、既報の通り十三日同会を代表した副会長遠藤光徳氏を始め松本教育民生部長、鶴田県教学課長、下田医専校長、田中会長代理、塩谷県会事務局長らが上京滞京中の本県関係貴衆両院議員の加勢を得て、政府当局に対する積極的な陳情を行う。

三三 昭和二十二年二月九日

昇格問題で学生起つ(主) 決議文を吉田知事に手交(脇) 米子医専(頭)(六―八段)

大学昇格か廃止か米子医専の学校処理問題は同校学生間に相当のショックを与え、十二日同校で開かれた一年生の学生大会に呼応して今度は二年生学生全員百四十名が十七日午前九時学生大会を開催、同校の大学昇格運動を強力に推進するとともに、本年四月切捨てられる一年生を救済するため、特設予科かまたは特設学校のようなものを学内に設け一年生を収容すべきであるという決議文を可決、全員署名の上十八日学生代表四名が上京して吉田知事にこれを手交、当局の援助を要請した。また、この運動を推進するため総務ほか六部の実行委員会を組織するとともに、今後、大学昇格の予科設置に伴う資金獲得のため近く学童の回虫診察、地方映画巡回に乗り出すことを申合せた。

三四 昭和二十二年二月二日

米子医専は他校より好条件(主) 六・三制義務教育は初中一年のみ決定(脇)(五―九段)

米子医専昇格問題および学制改革などについて要務のため上京中だった松本県教育民生部長は十九日夜帰鳥、医専昇格運動の陳情などについてつぎの如く語った。

◇医専の昇格はひとり米子医専の問題でなく広く高専の大学昇格に関連することであるが、文部省としては医専を大学にする線に向って進んでいるものの、大蔵省の方では財政貧困なこの時代、医専の昇格などはやめて現在の医大だけでいいじゃないかという反対意見をもっている。しかし文化国家の重要な基盤としても医専の大学昇格を全面的にやめて廃止することは出来ないだろう。文部省では現在医専昇格問題の起っている青森、

群馬、松本、徳島および米子の五校について民間有識者との間に研究調査した結果、学校設備ならびに地もとの熱意の点で米子医専は他校よりもすぐれておることを認めており、これについては地もとの絶大な熱意と応援に感謝するが、今後ともこの熱意を続けていただきたい。自分としては全般的な高専の問題ではあるが、大学昇格が実現する場合は現在認められている学校施設と地もとの熱意にかんがみ優先昇格するように念を押ししてきた。

(この後、学制改革についての談話あり。)

三五 昭和二十二年二月二二日

文部省も賛意表明(主) 米子医専の昇格運動進む(脇) (左カター―二段)

米子医専の大学昇格を促進するため期成同盟会では去る十三日副会長遠藤光徳氏をはじめ松本県教育民生部長、池田米子医専事務部長等が上京、本県選出の代議士も加えて文部、大蔵の両当局に陳情、一行は十九日夜帰県した。遠藤光徳氏は次のように語る。

山陰道に医科大学を設けることは文部省も賛成で、大体の意見としてはAクラスに繰入れて処理し学生の切捨は行わぬようにしたいことだった。しかしこの問題は医学刷新委員会よく検討した上最後の決定を行うので委員の一人である草間教授に面会したが印象は極めてよかつた。大学昇格に伴う施設費は六百万円を要するが、大蔵当局も医学刷新委員会が昇格と決定すれば予算に繰入れるといっていた。今後、地元当局が一層大学昇格に力を入れて猛運動することが必要である。

三六 昭和二十二年二月二七日

米子医専大学に昇格(主) 二六日の臨時閣議で決定(脇) (一―三段)

政府は二六日の臨時閣議で青森、前橋、松本、徳島、米子の五官立医学専門学校に大学昇格を決定した。

なお、これと同時に臨時医専十三校ならびに樺太医大、東京歯科大学は二二年度から生徒募集を停止することになった。

三七 昭和二十二年六月二一日

名称は「山陰」(主) 医大開設進む(脇) (二―五段)

米子医専は昇格という形式をとらず新たに医大を開設、明年度開設の運びとなっているが、こんど文部省に医専所在地の知事、地元市長、校長等によ

る医大開設委員会が設置されるのに伴い、地元ではそれぞれ「医大開設促進委員会」が新設され、敷地、校舎その他開設準備の促進を図ることになったので、米子医専でも近く委員の顔ぶれを決定発足する。下田校長は十九日上県、県当局とこの問題について打合せを行ったが、目下予想されている委員の顔ぶれは、池田医専事務長、土谷、栗林、米子市会正副議長、遠藤光徳の五氏である。なお、校名については米子医大とせず、開設にあたり鳥取、島根両県の協力を求めるためと、かつ将来の総合大学設置ともならみ合せ「山陰医科大学」とする模様である。

三八 昭和二十二年九月七日

大学開設に難点(主) 敷地確保が問題(脇) 米子医専(頭) (五―六段)

文部省から六日米子医専へ「近く大学の官制を発表するが、設備その他が文部省が示した標準に達しない場合は大学開設を延期するかもしれない」旨の通知があった。同医専の校舎拡張敷地は現在文部省が示している最少限度のものをはるかに下回っており、敷地確保に今後相当の難点があるので、同校では県および当局に協力を懇請している。

三九 昭和二十二年一〇月二日

敷地問題に曙光(主) 解決に市の協力(脇) 医大(頭) (五―七段)

山陰医大開設準備委員会は三十日米子医専で開会、野坂米子市長以下委員十二名が出席、規約および役員を決めたのち、未解決のままになっている校舎敷地問題について協議した結果、米子市が責任をもって解決にあたり、もし暗礁に乗り上げた場合は委員会が解決に努めることになった。同日決定の顧問、正副委員長次の通り。

△顧問 西尾知事、野坂米子市長、下田米子医専専校長△委員長 南副知事△副委員長 山本県教育民生部長、土谷米子市会議長

四〇 昭和二十二年一二月六日

医専調査に四氏来県(一段)

一時危ぶまれていた敷地買収問題もすでに終わった米子医専では、山陰医大開春開設をめざし着々準備をすすめているが、十三日文部省米原教学課長、同視学委員草間(慶大) 上野(金沢医大) 吉松(阪大) 三教授が下調査に来県する旨、このほど米子医専に通知があった。

四一 昭和二二年二月一〇日

校名は米子医大(主) 明春開設正式に決る(脇)(二―三段)

難航を重ねていた米子医大の開設が決定した。医大開設に伴う校長会議に出席のため上京していた米子医専下田校長は九日帰米、次の通り語った。

米子医大の開設は閣議を通り、いよいよ明春四月から開校することに本決まりとなり、ここ数日中に官制が交付される。校名についてははじめ山陰医大の説があったが、結局米子医大として四年制の旧制大学となる。明年四月には高等学校から四十名の学生を募集する。従って現在の医専は大学生が卒業する二十六年四月から廃校となる。医大開設臨時設備費は百万円計上されている。

四二 昭和二三年二月一四日

米子など五医専昇格(四―五段)

文部省では医学を大学教育に統一する建前から昨年六月官公私立医専二十一校中、北海道を除く二十校に対し大学昇格への道を開いていたが、今回、前橋、弘前、松本、徳島、米子の五官立医専を正式大学に昇格することに決定、十三日右にともなう人事を発表した。五医専は四月からそれぞれ大学として開校するが、生徒募集その他は未定。

四三 昭和二三年二月一五日

期待にそう(主) 下田医専校長談(脇)(四―五段)

米子医大の開設はいよいよ本決まりとなり、初代校長には現米子医専校長下田光造氏が決定したが、同氏は十四日今後の抱負を次のように語った。

大学は立派な医者を養成することと学術の研究で世界医学に貢献する二つの使命を帯びているが、地方によって特殊医学があり、山陰地方におけるこれらの研究をして大いに皆さんの期待に沿いたいと思っている。このために教授の厳選と設備の充実が急務であり近く教授を本省に上申する。

四四 昭和二三年二月二二日

開校は五月頃か(主) 看板掲げた米子医大(脇)(三―五段)

「米子医科大学」と県民にとつてうれしい山陰地方には初めての「大学」の看板が三十日米子医専の看板と仲良く肩をならべて掲げられた。米子医大は近く四十名の学生を募集するが、政変のため予算審議が遅れ開校は五月頃になる模様だ。

既に初年度の教授十名の人選も終わり、近く米子医専池田事務部長が上京、文部省に上申する。

米子医専は現在の二年生が卒業する二十四年度限りで自然廃校となり、二十五年には懐かしい「米子医学専門学校」の看板ははずされることとなり、医大、医専の両看板が並立するのものと二年余りだ。

四五 昭和二三年三月二四日

米子医大入試は来月一九日(二―三段)

入学志願者募集を始めた米子医大の願書受付は二十五日から四月十五日まで、試験期日は四月十九日、入学出願資格は高等学校および医専卒業生、これと同等の学力を有するもので高校卒業生以外は十八日の予備試験を受けねばならない。募集人員は当初より増え約五十名、なお授業開始は五月一日の予定である。

医大教授六名決まる(右記事の左、三―四段)

米子医大初年度教授八名のうち内定したもの、次の顔ぶれ。
△解剖学、森優(九大教授) △生理学、福原武(元北京大学教授) △病理学、徳光美福(元京城大学教授) △薬理学、田中潔(米子医専教授) △衛生学、村江通之(米子医専教授) △法医学、小邊重男(新潟医大教授)

四六 昭和二三年四月一七日

米子医大二次募集を考慮(一〇段)

米子医大願書受付は十五日締め切られたが、募集人員約五十名に対し応募者は男子三十七名だけで定員に満たなかった。同医大では第二次募集を考えているが、入学試験は予定通り十九日に行う。

四七 昭和二三年四月二二日

医大合格者発表さる(四段)

米子医大は二十日第一回合格者二十七名を発表した。定員は五十名だが文部省の指示がない限り再募集はしない。なお、入学式は五月三日午前九時から行う。合格者は次の通り。この後に二十七名の個人名と出身地(島根八名、鳥取七名、岡山、兵庫各三名、滋賀、京都、大阪、広島、福岡、鹿児島各一名)の記載あり。筆者注

四八 昭和二三年五月一四日

医大も含む県大学（主） きょう打合会に提案？（脇）（五）七段）
 くすぶりつづけている鳥取農専、鳥取師範の大学昇格問題について、いままでのいきさつを水に流し、県のきも入りできょう十四日農専と師範側の第一回連絡協議会が開かれるが、同協議会には鳥取農専、鳥取師範、青年師範をはじめ県側、県議、民間有識者が出席、十二日帰県した藤井県学務課長から本省の意向を伝達し話し合いが進められ、場合によっては米子医大を含めた「国立鳥取大学」案がそ上のせられることも考えられる。

四九 昭和二三年五月一五日

複合には各校賛意（主） 医大参加への態度未定（脇） 大学問題協議始まる（頭）（トツプ一）五段）

農専、師範を昇格し米子医大を加えて国立鳥取大学を設立しようとする第一回の関係者懇談会は県の肝いりで十四日午前十一時から県会議事堂で開催されたが、農専、師範とも国立複合大学の案に反対なく、米子医大の参加は早急に決しないものの、来る二十五日には第二回の懇談会を開き「大学設置委員会」を結成、二十四年度の開校をめざし仮事務局も県学務課内において設立運動を促進することになった。（前文）

この日県側からは西尾知事、南副知事、山本教育部長、藤井学務課長、佐々木主事、河上視学、県会代表として沢住教育部委員長、中田、佐々木正副議長、師範側から小倉校長、大塚女子部長、山本庶務課長、青年師範佐々木事務局長、農専若木教授ほか同学生のオブザーバー、米子医大下田校長、池田事務部長ら十八名が出席、まず県側から鳥取農専、鳥取師範、青年師範三校に残された大学昇格への道は複合大学案しかないことを強調、師範小倉校長もまた「本省の意向であれば単独大学を断念するほかない」と県案に同調。

これに対し農専は目下角倉校長が上京中で最終的な態度は十七日同校長の帰来を待たねば判然としないものの、出席の若木教授は「教授がこの問題に口出しできるようになったのは一週間ばかり前だ、もともと学校内では阪大との合併、松江と一緒にするか、複合でいくかという三つの意見があり、いづれとも判定しかねるが自分は複合の線がのこされた道であり、一番妥当な方法であろう」と述べた。

一方、米子医大下田校長は「国立としてすでに発足している本校が新制度の大学に突然合併せよといわれても、この席では返答しかねる。この問題は追って協議することにしてもらいたい」と述べたが、複合大学への底流には農専、米子医大とも賛意を表しており、問題はいかにしてまとめ上げるかの

方法だけになった。次回は来る二十五日懇談協議することになったが、五月末までに提出するようになって「大学設置案」を文部省を経て大学設置委員会に出さねばならぬので、これが草案をねることになっている。草案の骨子は、

学芸学部三年（通算）農学部四年（通算）さらに米子医大が加われば医学部六年（通算）としそれぞれの学部に進学する大学前期二カ年の一般教養課程は学芸学部の前期二カ年と合併する。また学部の講座数は学芸学部三一講座、農学部二三講座、医学部二四講座とする。

協力は惜しまぬ 下田医大校長談（右記事の左、一）二段）

複合大学を根本的に否定しているのではない、もともと国立医大も昭和二十九年年度から新制大学に切りかえられることになっているので、当然「国立鳥取大学」に加わるべきだが、今急に合併せよといわれても医科一本やりで進んで来ている本校の複雑な事情もあり、また程度も低下するので、追って協議してもらいたいと述べたまでで、複合大学へ暗影を投じたものでない。大学設置委員会にも加わり国立鳥取大学への協力は惜しまない。

五〇 昭和二三年五月二六日

設立準備着々進む（主）二九日最後原案討議（脇）鳥取大学（頭）（二）五段）
 鳥取大学の設立についてはさる二十二日文部省で開かれた関係者の協議会でようやく最終的決定を見、さる十四日県会議事堂で行われた第一回協議会のいわゆる県案がいよいよ具体化されることになったが、県では二十九日、県会議事堂で鳥取大学実施準備委員会を開き最後の原案を討議、六月五日までにこれを本省に提出することになった。なお二十二日の文部省における協議会に出席した河上県視学は次のように語った。

農専側の阪大合併説は本省の「同一地方の高専はできるだけ一つにまとめることが望ましい」という意向から承認されなかった。青年師範の身のふり方についてはそのみが独立して他校と合流することなく、新制大学の中に吸収されることを強調され学芸部（師範）と一緒になる模様、また実業科教員の養成についても本省の意向は新制高校の実業科教員は農学部とする方針のようだ。一方本省のもくろむ大学案の骨子としては（一）現在の学部、学科を基礎として予算の膨張、新築は見合わせる。（二）教授については地方中央の審査会の厳重な二重審査をする。（三）施設、予算両面については地方の援助を求める。（四）大学は間口が広く奥行きが狭いものはダメ、という四原則を打ち立てているが来年度からはとりあえず建物、器具、教授陣の充実に

着手する。なお米子医大は国立医大が新制大学にきりかえられる昭和二十九年までは「鳥取大学」に参加しないことになった。

米子医大は不参加（右記事の左、三〜四段）

鳥取複合大学設立の打合せのため上京していた米子医大池田事務部長は二十四日帰米、次の通り語った。

米子医大は従来通り単科大学で進むことになり、二十九年度の新規大学切替までは鳥取複合大学には参加しないことになった。したがって本県の複合大学は農専、師範、青年師範の三校で設立されることになる。

五一 昭和二十三年七月五日

下旬には完成（主）米子医大本館（脇）（八〜九段）

今春三月総工費三百五十万円で建築にとりかかった米子医大の本館および外来診療所は目下八十%方工事が進み、今月下旬には竣工する。本館は七間に三十間の二階建てで各課室、講堂、会議室が設けられ、本館筋向いの外来診療所（二階建て七間に二十五間）には内科、皮膚科、泌尿科、小児科、眼科各室が設けられ、完成後現在の校舎は全部基礎学科研究室にあてられ、附属病院は入院患者室となる。（写真は完成迫った医大本館）

五二 昭和二十三年八月三日

建築を許可（主）米子医大臨床講堂（脇）（七段）

米子医大の臨床講堂および看護婦寄宿舎（総工費二百万円、二百坪）の建築が許可された旨二日文部省教育施設局中国出張所から米子医大に内報があった。十月起工、竣工は十二月ころの予定。

寄宿舎は病院裏に、臨床講堂は外来診療所の隣に建てられる。

五三 昭和二十三年一月三日

喜びの開校式！（主）山陰が誇る医学の殿堂（脇）米子医大（頭）（一〜三段）

山陰地方でただ一つの官立大学として発足した米子医科大学および米子医専の開校記念式はきょう三日のよき日盛大に挙行される式は、午前十時から同校大講堂で文部省当局はじめ鳥取、島根両県知事、岡山医大、九大その他地方官民多数を迎えて行われるが、ひきつづき八日間にわたって記念運動会、講演、展覧会、特別診療、音楽会など盛りたくさんの記念行事を繰りひろげる。

同校は文化施設に恵まれない山陰地方として各方面から多大の期待がかけられ、去る昭和二十年四月はじめて現在地に米子医専が設けられて以来、下

田校長以下学校当局、地方官民の血のじむ努力と幾多の難関を突破、さらに本年四月には大学の新設がみられるにいたったもので、教授陣三十四名、学生二百五十名、職員二百四十名、看護婦百余名合わせて六百二十余名の大世帯を擁し名実ともに地方医学殿堂として頂きをなしている。

五四 昭和二十三年一月二日

医大の臨床講堂を起工（六段）

米子医大の臨床講堂（一階建て百坪）と看護婦寄宿舎（平屋百五十坪）は来る六日総工費二百五十万円で第二外来診療所横に起工、一月いっぱい竣工の予定。

五五 昭和二十四年二月二日

工事が進む（主）米子医大完備へ（脇）（四段）

昨春四月新発足した米子医大は本館外来診療所を建設、目下看護婦寄宿舎、臨床講堂を建設中で着々完成に向かって進み二十五年度には教授会も結成される。同大学が医大としての教授陣や施設を完成するのは来る二十六年程度が二十四年度以降の施設には次のものが予定されている。

解剖、病理各実習室、手術室、血清研究所、外来診療所の拡張、病棟、隔離病舎、患者の給食施設、臨床実習室の改造。

五六 昭和二十四年二月二日

県大学に医大包含（主）文部省から内報届く（脇）（六〜八段）

開校予定をあと一カ月余りにひかえた「鳥取大学」は最初米子医大を切りはなして農学、学芸学部だけ早急に開校することとし、米子医大の合流は昭和二九年度からとされていたが文部省直近の強力な意向として、暫定的にせよ一県二大学部では一県一大学の根本方針にそわぬから、今年

四月開校には米子医大を含めよ。

との内報があり下田米子医大校長はこのため文部省と目下折衝中である。

なお、もし米子医大をふくむ鳥取大学が出来上がるとすれば、もともといる「学長」は下田校長に落ち着くのではないかという見方が圧倒的である。

五七 昭和二十四年五月一〇日

鳥取大学は第二期 国立大学の選抜要領（四〜一〇段）

文部省は九日国立新制六十八大学の入学者選抜要領を次の通り発表した。

新制大学の学力検査などは全国を二期二期に分けて行い、その期日は入学願書受理期間は一、二期とも五月十三日より二十六日まで、入学考査期日は第一期六月八日より、第二期六月十五日より、合格者発表期日は各大学とも遅くも六月二十六日までとする。第二次募集は第一次募集で合格者の数が定員に満たない場合は六月二十九日から七月九日までの間に行い、その細目は当該大学で定める。授業開始は第一次募集のみの大学では大体七月初め、二次募集を行う大学でも七月二十日ごろの開始の予定。また選抜に当たっては入学資格のある者はすべて平等に取扱われるが、旧制大学の予科に在学している者がその大学の転換した新制大学に入学を志願する場合には別の選抜方法を行っても差支えない。

今年度の学力検査受験資格者は本年度実施した進学適性検査受験者に限るが、東京水産だけは当大学で行う進学適性検査を受け学力検査も次の表とは別に行われる。また現に国立の旧制高専（ただし旧制高校第一学年を除く）および教員養成諸学校に在籍する者は退校して受験する必要はなく在籍のまま受けられることになった。

なお東京水産大学を除く国立六十七大学の試験期別は次の通りだが、秋田大学および上田繊維専門学校についてはなお審査途中で次の表には記載されていない。

これより後半は、一期と二期の大学名の羅列。

五八 昭和二五年一月一四日

医学部に予備課程（主） 鳥大の募集要項決る（脇）（トッパー）四段）

国立鳥取大学では二十五年度の入学生の募集要項を決め発表。今年は学芸学部と農学部は昨年同様だが、新たに医学部予備課程（二年間）が設けられるほか、従来受験地は鳥取だけだったものが米子でも受験できることになった。選抜は学力検査と今月三十一日に行われる進学適性検査、身体検査及び出身学校長の内申を総合する。募集要項は次の通り。

募集人員

①学芸学部 省略

②農学部 省略

③医学部予備課程（二年制） 約三〇名

入学考査、学力検査、身体検査、面接で学力検査は△国語△社会△数学△理科△外国語（英語）

期日 出願は二月一日から二月二十五日まで、考査は三月十一日から三日間、

発表は三月二十五日。

考査場所 学芸学部は鳥取大学学芸学部（鳥取）と医学部（米子）△農学部は鳥取大学農学部（鳥取）と医学部△医学部予備課程の場所は未定

五九 昭和二五年二月一八日

殺到する白線浪人（主）競争率六倍の米子医大（脇）（七）九段）

米子医大では本年度入学志願者（旧制）の募集を十五日締切ったが、十七日までに願書到着のものは六高の三五名を筆頭に松江高三四名、広島、松山の各二一名、七高一六名、姫路一五名、浪速一六名、山口一二名、富山一一名、その他を合わせて二五三名で旧制大学募集は本年度で打切られる。

このうち二十三年度に高校を卒業したいわゆる白線浪人はざつと半分の一〇五人。

四月九、十両日入学試験の結果四〇名の合格者をきめることになっており六人弱に一人という競争率である。

六〇 昭和二六年一月二三日

医学部五〇名（主）鳥大で学生募集（脇）（一一）一二段）

国立鳥取大学の新学期学生募集は医学部が初の入学生を迎えるほか農学部、学芸学部でも人員その他を次の通り決めた。

医学部 約五〇名 願書受付二月一日から二十日まで、選抜試験三月二十七日、二十八日、合格発表四月五日

農学部 省略

学芸学部 前半省略 医学進学課程 約三〇名

いずれも志願書受付は一月二十五日から二月二十四日まで、選抜試験三月三日から三日間、合格発表三月二十日